

第2学年地理的分野学習指導案

島大附属義務教育学校後期課程

令和1年11月22日 岡田昭彦

1 単元名 日本 の 諸 地 域 関 東 地 方 ～ 人 口 、 都 市 と 村 落 ～

2 単元 の 目 標

(1) 関東地方の郊外から都心・副都心に人口が流れている地域的特色や、その結果、郊外の衰退と都心の再開発（コンパクトシティ）という課題を理解できる。

(2) 関東地方において、人口の回帰現象による課題を多面的多角的に考察し、その解決策を踏まえて、今後のまちづくりの在り方（都心部・市街地と郊外）を表現することができる。

3 基盤

中学校学習指導要領（平成29年告示）解決社会編を参考にすると、(3)日本の諸地域の「②人口や都市・村落を中核とした考察の仕方を基にして、空間的相互依存作用や地域などに着目して、「郊外から都心への回帰現象」を追究し解決したりする活動を通して、(ア)(イ)の事項を身につけることになる。単元の目標の(1)が(ア)、(2)が(イ)である。

2020年東京オリンピックのある関東地方において、コンパクトシティというまちづくりの概念は報道でもよくされている。さらに国土交通省のコンパクトシティは、「少子高齢社会、人口減少において、まちづくりは、地域の活力を維持するとともに、医療・福祉・商業等の生活機能を確保し、多様性のある交通手段を駆使して郊外とつながること」とも解釈できる。また、最近の東京は、国際的な地位の低下、首都圏直下型リスク、緑の喪失、過酷な通勤、交通渋滞、狭く短命で高額な住宅、雑然とした景観、老朽化したインフラ、文化や伝統の喪失など多くの現代的な都市的課題を抱えている(引用:ハイライフ研究所 都市研究メールマガジン2月号2018年2月28日)。

このような課題の多くが関連している人口の回帰現象を取り上げる。回帰現象を取り上げることで、緑の喪失、過酷な通勤、狭く短命で高額な住宅、老朽化されたインフラなどの都市的課題を捉えることができ、東京大都市圏で生活している人々の対応に着目して、地域的特色や課題を考えることができる。人口の回帰現象は、1970年代に建設されたニュータウンから都心副都心へ戻っていく現象であり、バブル経済が破綻した時から始まる。都心部の地価の低下、賃貸マンションの需要増、またニュータウン(郊外)の老朽化・交通の便の悪さ・通勤時間の遠距離・若年層・中高齢者の利便性の重視と言った、様々な理由による都心移転、これに伴う独居や空き家の増加、環境維持の課題が目白押しとなっている。ただ、都心部にも土地はなく、江戸湾を埋め立てて住宅や商業施設などを造っている。これらも含めて課題を考えると、都心と郊外を包括した都市(まち)づくりの再開発が大切であると考えた。

また、これらの課題が関東地方にだけ起こっている課題であると考えずに、島根県松江市のまちづくりも考えられる教材である。松江市はニュータウンではなく団地の建設が行われてきた。最近では、市街地にマンション造営が目立ち、島根県営のマンション(団地)も建設されている。

未来創造科における。「私たちのまちづくり」に活用できる知識の習得を目指すこともできる教材であると考える。

本学級の生徒は、現代の諸問題も数多く話し合ってきた。特に地理では、「環境問題と経済発展」「エネルギー問題（原発とバイオなど）」「EU の離脱」などを行ってきた。その度に解のない社会問題であることも実感してきた。しかし、解決策を話し合う中で様々な知識を獲得したり、これからの技術進歩に助けられ有効な解決策に成り得ることも学習してきた。学習は、常に話し合いが主体となっているので、司会等の役割がなくても話し合うことができる。今回の「人口の回帰現象」も、生徒側では、「なぜ、大型ショッピングセンターは郊外ではなく都心に多くあるのか」という島根県の生徒ならではの問いを解きながら、関東地方の課題に迫っていく形で話し合いをすすめていく。

最終的な概念的な知識は「少子高齢社会、人口減少において、まちづくりは、地域の活力を維持するとともに、医療・福祉・商業等の生活機能を確保し、多様性のある交通手段を駆使して、郊外とつなぐまちづくりが大切である」とする。

目標に準拠し評価したいことは、①各地域を活性化させる目玉（特色）があるか。②生活機能（建物）の確保ができていないか。③まちの事情にあった多様性のある交通手段で都心と郊外につながりをもたせたか。これらを思考・判断・表現の評価としたい。



【2019 国土交通省 HP より】

4 学習計画

時	学習内容 (○) と問い (◎)	学習活動 (●) と評価 (△)
1	○課題を見付ける 関東地方の概要を俯瞰することにより、関東地方の課題や解決である。 課題：関東地方において、郊外から都心部へ回帰現象が起き、様々な問題が生じている。その問題解決のため新しいまちづくりを構想する。	●地形図で「都心」「副都心」「郊外」の位置関係を書き込む。例「なぜ、関東地方には人が集まるのか」「どこから昼に来て、夜どこへ行くのか」「東京が人口減少したら、どのような状況になるのか」「なぜ、東京は都心に行くほどショッピングセンターが多くなるのか」などがあがった。
2	○課題を把握する。 ◎なぜ、関東地方には人が集まるのか。	●歴史的背景、産業、生活・文化、交通から多面的多角的に課題を調査する。
<p>単元を貫く課題</p> <p>「なぜ、東京都は島根県と違って、郊外ではなく都心・副都心の方に、ショッピングセンターが多く建設されているのか。そして、今、郊外や都心・副都心ではなにが起こっているのか。」</p>		

3	○課題を考察する。 ◎交通網を使って、郊外から都心へ、都心から郊外へ、何が移動するのか。そして、なぜ移動するのか。	●地図と統計資料を活用して、ヒト、モノ、情報、資金の動きを考察する。
4	○課題を考察する。 ◎なぜ、大型ショッピングセンターやアウトレットモールは郊外より都心部に多くあるのか。	●郊外から都心へ人口が流出すると、郊外、都心ともに、どのような課題が生じるのかを考察する。
5	○課題を解決し表現する（本時） ◎関東地方の人口の回帰現象から起こる課題を解決するために、どのようなまちづくりが必要か。地図に付箋で書き込み、来年度の未来創造科につなげよう。	●構想したまちづくりを地図中に表現する。この時、AI、IoT、ICTの技術も視野に入れる。 △少子高齢、人口減少において、まちづくりは、地域の活力を維持する特色を持ち、医療・福祉・商業等の生活機能を確保し、多様性（AI、IoT、ICTも含）のある交通手段を駆使して、郊外とつなぐまちづくりが大切であることを習得、活用できたか。

5 本時

(1) 本時の目標

- ・少子高齢、人口減少において、まちづくりは、地域の活力を維持する特色を持ち、医療・福祉・商業等の生活機能を確保し、多様性（AI、IoT、ICTも含）のある交通手段を駆使して、郊外とつなぐまちづくりが大切であることを理解できる。

(2) 本時の展開

	学習活動（○）と目標（◆）と評価（△）	指導上の留意点（●）
導入	○前時のふりかえりと本時の目標の把握 ◆関東地方の人口の回帰現象から起こる課題を解決するために、どのようなまちづくりが必要か。地図に付箋で書き込み、来年度の未来創造科につなげよう。	●単元の評価をするために、本時の目標を確実に把握できるよう常に目標が見えるように板書する。
展開	○3時間目から活用している「関東地方の交通網（ニュータウンも掲載）の地図」を利用する。 次の視点で考察しながら付箋を貼り、都市を造っていく。 ①各地域を活性化させる目玉（特色）があるか。 ②生活機能（建物）の確保ができていないか。 ③まちの事情にあった多様性のある交通手段で都心と郊外につながりをもたせたか。	●今までの既習知識を活用して、新しいまちづくりを構想する。 ●各地域の産業に目を向ける声かけをすることで、各地域の目玉を実現可能性の高いものにする。

追 究	○松江市では、同じような現象が起きてないか、自分たちの登下校や学校からの風景から想像する。 △これからの「まちづくり」で大切なことは何か。振り返ってみよう。	●3年生の「地方自治」もしくは「人口問題」などで取り組み、財政や政治のしくみを学習して実現可能な解決策を見つけていく予告する。それと未来創造科で自分たちの企画を考える時に本単元の学習を活用することを示唆する。
--------	---	--

(3) 本時の地理的な見方・考え方を活用している生徒の姿とは？

◆「交通網の地図」に付箋でまちづくりをする時、既習事項である「工業の分布図」や「農業の分布図」など、様々な地図と比較関連させて、話し合いながら①～③の視点でまちづくりを構想している姿。